

# 「附属池田中学校を中心とした専門的学習ネットワーク」の構築に向けた教員研修プログラム（イケトールーク）の開発

学籍番号 219129

氏名 三好 達也

主指導教員 木原 俊行

副指導教員 長谷川 和弘

## 1 現状と課題

所属校は、国立大学法人の附属学校である。附属学校の役割の1つに地域を越えた教育研究の普及・啓発をするという役割がある。所属校では、教育研究の普及・啓発として、毎年全国に向けて研究発表会を実施している。その研究発表会では、所属校教員は、授業力の向上に向けて主体的に学ぼうとする姿勢が強いので、提案性のある授業を公開している。しかし、研究発表会の参加者は数年前から減少傾向にあり、教育研究の普及・啓発という点で十分な役割を果たせているとは言えない。また、研究発表会の参加者が少ないため、所属校教員は、自身の取り組みに対する意見をもらう機会が少ない。附属学校として取り組みを全国の学校に教育研究の普及・啓発をしていくこと、所属校教員の授業力向上や主体的に取り組む意欲を高めること、この2点において課題がある。

そこで、本研究では、附属池田中学校を中心とした専門的学習ネットワーク（PLN）の構築に向けた教員研修プログラム（イケトールーク）を開発することでこれらの課題を解決することをめざした。

## 2 R3年度教員研修プログラム「イケトールーク」

所属校を中心とした専門的学習ネットワークの構築に向けた、教員研修プログラム（イケトールーク）とは、1回あたり90分のオンライン研修会である。そのスタイルは、実践報告会、授業検討会、情報交換会の3つである。会を運営するにあたり、会全体を主催するコーディネータ、会を進行するファシリテーター、会で実践報告をするプレゼンターの3名が重要な役割を担う。イケトールークの特徴として、参加者がアウトプットする場面が多様にあることが挙げられる。それらは、①会の中で直接発言する、②jamboardを活用して文字言語でアウトプットする、③リフレクションを記入し、参加者全体で共有する、などである。イケトールークは、プレゼンターと参加者の学び合いを実現する仕掛けが多いところに、そのよさがある。R3年度はさまざまな教科等で行い、合計21回実施した。参加者や本校教員のアンケート結果から、イケトールークは、所属校教員や参加者の授業力向上やそれに主体的に取り組む意欲を高めることにつながる可能性が示唆された。一方で、参加者からは、オンラインではなく対面で参加したいという声や、ICT機器を使った実践報告が聞きたいといった声が聞かれた。十分に参加者のニーズを捉え

られていないという課題も露わとなった。また、所属校教員から、イケトークを次年度以降も所属校の取り組みとして続けていくために、学校組織として運営していく必要性を指摘された。参加者のニーズを捉えつつ、持続可能な取り組みにするという課題に、R4年度に取り組むこととした。

### 3 R4年度「イケトーク」

R3年度の反省をいかし、R4年度は、R3年度の参加者アンケートから明らかとなった参加者のニーズと本校教員のニーズを捉えた上で、その実施内容を決めることとした。その結果、ICTを活用した実践報告をできるだけ多く実施することとした。また、対面実施の希望者がいたこともあり、R4年度はオンラインに加え、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド型の会も、そのスタイルに加えた。また、学校組織として持続可能な取り組みにするために、校務分掌（研究部）の中にイケトークの企画・運営担当者を位置付けて、筆者を中心として組織的に取り組める体制を作った。R4年度は全25回（R4年5月～R5年3月）を実施することとした。R3年度同様、会は、コーディネータ、ファシリテーター、プレゼンターの3名が中心となって運営される。R4年度については、ファシリテーターの役割を筆者のみならず研究部のメンバーにも担ってもらうこととした。

R4年度は年間通して実施することもあり、第14回の実施後の8月に中間評価を行った。中間評価では4つの課題が明らかとなった。そこで出た4つの課題の改善に、第15回からのイケトークでは取り組むこととした。第17回終了後のR4年11月にR4年度のイケトーク参加者と所属校教員に、評価のためのアンケートを実施した。また、イケトークを計画、実施するにあたり深く関わりをもっていた4名（学校長、副校長、主幹教諭、研究主任）にインタビューを実施した。アンケートやインタビューの結果、イケトークは所属校教員にとっても参加者にとっても有益な機会であることが分かった。イケトークが学校の教育活動の発信につながるると同時に、他校教員ともつながるという、教職員のネットワークを構築する場になっている可能性も示唆された。一方で、所属校の取り組みとして継続していくためには、校内の分掌に位置付けただけでなく、今以上に組織的に取り組む必要があることも明らかとなった。

### 4 イケトークの展望

2年間の取り組みでイケトークは所属校の教員にとっても参加者にとっても有益な結果をもたらすことが示唆された。その結果、R5年度以降もイケトークは継続することとなり、R5年度以降は、所属校の夏季実践報告会として、イケトークが位置付くこととなった。イケトーク（夏季実践報告会）に向けて、研究部の組織体制を見直し、3人体制（コーディネータ、案内発信担当、申込担当）でイケトークに臨むようにする。また、実施までの流れについても年間計画を作成し、全教職員で共有しながら進めていきたいと考える。また、実施後は、参加者、所属校教員アンケートを実施し、分析した上で更なる改善を行っていく。PDCAサイクルを丁寧に繰り返し、よりよい形を模索し続けていく。